

### (3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないこと。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けること。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下とすること。

NITS・教職大学院・教育委員会等	実施機関名・連携機関名 岡山大学大学院教育学研究科
	事業名：【NITS・岡山大学教職大学院コラボ研修】学校リーダーを対象とした ESD 研修
コラボ研修プログラム	主タイトル及び副タイトル 「学校リーダーを対象とした ESD 研修」 学校リーダーが語る。ESD のホールスクールアプローチについて、探究心を持ちつつ自律的に学ぶ。
支援事業報告書	開催日時：令和 7 年 12 月 26 日（金） 13 時 30 分～16 時 開催場所：日本出版クラブビル（東京都千代田区神田神保町 1-32） 参加人数（総数）と参加者の属性：（43 人） 学校長 6 人、一般教員 14 人、教職大学院生 23 人 うち、オンサイトでの参加（13 人）、オンラインでの参加（30 人）

#### 目的：

ESD（持続可能な開発のための教育）のホールスクールアプローチ（Whole School Approach、学校包括型アプローチ）は、ESD 推進の鍵である。令和 3 年 5 月改訂の日本ユネスコ国内委員会による『持続可能な開発のための教育(ESD) 推進の手引』では、各学校における ESD 実践に向けてのポイントとして、ESD 推進のためのカリキュラム・デザインとともに、ESD 実践における機関包括型アプローチの促進が挙げられている。また、全国のユネスコスクールの教員が参画し作成した『学校教員による ESD の評価づくり』（ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）編集、令和 5 年 2 月発行）においても、ESD 実践における学校の基本的なあり方としてホールスクールアプローチが挙げられており、その内容として(1)学校の運営、(2)教室内外の学び、(3)設備と環境、(4)地域との連携が重要であることが指摘されている。しかし、このアプローチの中心を担うべき学校リーダーについては、ESD 研修の機会はこれまでほとんど保障されてこなかった。

以上を踏まえ、本事業では、ESD のホールスクールアプローチの実践を支援するために、学校リーダーを対象とした ESD 研修を実施する。研修の目的は、学校リーダーが ESD のホールスクールアプローチについて「探究心を持ちつつ自律的に学ぶ」ことであり、研修の目標はその実践に必要な気付きを得ることであった。

**内容：** ※全体発表の内容をテーブル起こしするなど、具体的に記載すること。

時期	内容	備考
11月中旬	打合せ（学校リーダーを対象とした ESD 研修の開発についての協議・検討）	
11月下旬から 1月初旬まで	研修（学校リーダーを対象とした ESD 研修の実施（自習教材を用いた研修、並びに 12 月 26 日に【NITS・岡山大学教職大学院コラボ研修】学校長を対象とした ESD 研修を開催）	12月26日の研修（公開）について、参加者 43 人、東京・日本出版クラブビル
1月初旬	打合せ（学校リーダーを対象とした ESD 研修の評価について協議・検討）	
1月下旬	打合せ（学校リーダーを対象とした ESD 研修の報告書について協議・検討）	

12 月 26 日の研修（公開）では、ESD のホールスクールアプローチについての講演とラウンドテーブルによる意見交換を行った。講演では、棚橋乾（全国小中学校環境教育研究会）が「ESD ホールスクールアプローチの実践と次期学習指導要領」という演題のもと、ホールスクールアプローチの要素（ビジョン、学校の運営、教室内外の学び、設備と環境及び地域との連携）ならびにこのアプローチを持続する鍵（①教師が児童生徒主体の

探究的な学びの指導方法を身に付ける、②評価を工夫し、児童生徒が自己の成長に気付く自己評価をする、③総合的な学習の時間を中心にESD実践の時間を確保する)について解説した。また、ラウンドテーブルでは、「ESDのホールスクールアプローチ実現の鍵となるもの」というテーマのもと、櫻井美佐子（宮城県気仙沼市立階上中学校）がこれまでの階上中学校の取組、ESDカリキュラムのデザイン、対話を軸とした実践紹介を行った。また、市之瀬輝明（東京都板橋区立緑小学校）が都会の森を守り育てるための各学年の実践紹介の後、ホールスクールアプローチ実現の鍵として、ビジョンの確立と方向性の明確化、システムの設計（持続可能な仕組みづくり）、人材確保、広報の4つを指摘した。さらに矢吹玲子（岡山県岡山市立後楽館高等学校）が教科と総合的な探究の時間「岡山未来」を柱とした学校全体でのESDの取組について報告した。そして市瀬智紀（宮城教育大学）がESDのホールスクールアプローチに対する教員の課題意識ならびに気仙沼市内の学校が進めるESDの地域連携について紹介した。ファシリテーターは藤井浩樹（岡山大学教職大学院）であった。

**成果：**※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載すること。

研修に参加した学校リーダーは、ESD推進の鍵であるホールスクールアプローチを学ぶことにより、自らのESD実践の意味付けや捉え直しを行い、実践を発展させるための気付きを得た。このことは、「他校の実践を聞き、自分の学校のESDの特長に気付きました」といった発言に表れていた。また、教師としての自己アイデンティティーである自己の「在り方」の発見や問い直しを行い、実践を発展させるための気付きを得た。このことは、例えば「学校全体で（ESDに）取り組むには同僚と協力する必要がある、難しさとともにその良さも感じます」といった発言に表れていた。このようにして、学校リーダーにおいて「豊かな気付きが醸成される学び」が実現したと考えられる。

### 「NITSからの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

同提案では、「研修の目的」の在り方として「探究心を持ちつつ自律的に学ぶ」ことが掲げられている。また、「研修目標の3要素」の一つとして「自らの教育実践の特徴や枠組みについて、気付きがある」こと、並びに「自己の『在り方』について、気付きがある」ことが挙げられている。

本研修に参加した学校リーダーは他校のESDのホールスクールアプローチを学ぶことを通して、自校のアプローチを相対的に見るができるようになり、その良さや課題に気付くことができていた。また、学校リーダーとしてのこれまでの取組に自信を深めると同時に、取組の継続のために自分が果たすべき役割について気付くことができていた。こうした成果を研修担当者自身が気付くことができた。

**アイデアや工夫したこと：**※実際の様子により分かるよう、必要に応じて写真や図を用いて説明すること。

#### 1. アイデア

ESDのホールスクールアプローチはESD実践のポイントの一つであるが、その中心を担う学校リーダーへの研修の機会はこれまでほとんど保障されてこなかった。この課題はユネスコをはじめ世界的に認識されており、ESDの継続発展に必須と捉えられている。本研修はこれへの対応策を具体化した。



図1 ESDのホールスクールアプローチの説明するスライド（研修担当者）



図2 ESDのホールスクールアプローチの実践紹介（櫻井氏）

#### 2. 工夫したこと

##### (1) 登壇者選び

宮城教育大学とユネスコ・アジア文化センターと連携し、全国的に見てESDのホールスクールアプローチの優良事例と考えられる学校を、小・中・高等学校で各1校選び、学校リーダーである学校長に登壇を依頼した。

##### (2) 参加者の募集方法

文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会は、ユネスコスクールをESDの推進拠点として位置付け、このネットワークを活用して新しい教育内容や手法の開発を目指している。そこで今回の研修では、ユネスコスクールの催しの機会を利用して、参加者を募集した。具体的には、令和7年11月15日（土）に岡山大学で開催されたユネスコスクール地方連絡会・地方セミナー、並びに同年12月7日（日）に上智大学で開催されたユネスコスクール全国大会であった。また、ユネスコスクールの事務局であるユネスコ・アジア文化センターと連携し、ユネスコスクールのネットワークやユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet、令和7・8年度は岡山大学が幹事校）を通じて、参加者を募集した。